

新政府をけん引した大久保利通

文政 13 年(1830)薩摩藩士大久保利世の長男として生まれる。大久保家は下級藩士の家で、藩校造士館で西郷隆盛などとともに学び同志となった。胃腸が弱く武術は得意ではなかったが、討論や読書などの学問は郷中のなかで抜きん出ている。

彼は欧米視察し --- 日本の進むべき道を確認する --- 内務省を作る --- 批判を受ける --- 明治維新の大義とは --- 真意と功罪に迫る --- 専制か民主化 --- 近代化の立役者として殖産興業路線をやりぬいた

慶応 3 年(1867)版籍奉還

明治元年は 1868 年 10 月 23 日をさすが、一般的にはその前年に当たる慶応 3 年(1867)の山形有朋・野村が中心になって進めた大政奉還、王政復古の改革を差すことが多い。版籍奉還とはいえ当時全国で 3000 万石のうち、維新政府は徳川幕府から譲りうけた 800 万石しかなく、統一した軍事行動はできなかった。

その上、藩主は知藩事として残り江戸時代と変わらなかった。中央集権を進めるには藩主の協力は不可欠であり、そのため改革はゆっくりとしたテンポでしか進められなかった。

*明治 2 年 新政府は財政確立のため重税を課す --- 凶作に見舞われる --- 全国に一揆がおこる --- 新政府に不信

*大久保は難局打開のため地元薩摩の島津久光に助けを求めため鹿児島へ --- しかし、久光は大久保を批判 --- 逆に薩摩兵 1,000 名を撤退させる --- 内乱の危機

明治 4 年(1871) 廃藩置県 山形有朋・野村など中堅官僚が、藩の解体しか道はないのでは --- これができるのは天皇しかいない・天皇の名において廃藩置県が命令される --- 各藩は戊辰戦争で疲弊していたときで、案外スムーズに移行した --- 旧藩 261 が 3 府 27 県に --- その後明治 5 年に 69 県、明治 6 年に 60 県、明治 8 年に 59 県、明治 9 年に 35 県 --- 明治 22 年に 3 府 43 県(北海道は除く)に落ち着いた

*その後、地租改正・国民皆兵制へ

明治 4 年(1871)11 月岩倉視察団出発

江戸時代に結ばされた不平等条約の改正の予備交渉・西洋文明の調査を目的に薩長中心に使節 46 名、随員 18 名、留学生 43 名。岩倉具視が特命全権大使を務め、副使として木戸孝光、大久保利通、伊藤博文、山口尚芳の 4 名。

サンフランシスコ、ワシントンに約 8 カ月滞在・イギリス 4 カ月・フランス 2 カ月・ベルギー、オランダ、ドイツ、スウェーデン、ロシア、イタリア、オーストリアでは万国博覧会を見学、スイスの 12 カ国にのぼる。スエズ運河経由で帰国したのは 1 年 10 カ月後。

特にイギリスでは産業革命が進み、機械化・完成品は鉄道で各地に輸送されるのを見て
→ 殖産興業で国力を高めることが求められると痛感し、国家主導で産業保護を考える

内務省を立ち上げ殖産興業へ

1年10カ月して帰国すると、新政府はゴタゴタし征韓論で揺れていた --- 大久保はこれに反対 --- そのため天皇を説得 --- 朝鮮派遣は延期となる --- 征韓論を押し進めた西郷は(江藤新平・板垣退助も)新政府を去る

*殖産興業を進めるために「内務省を立ち上げ、そのトップに」 --- 専制体制の樹立 --- 多くの批判が出される --- 板垣退助が「議会開設を申請」して大久保を批判

*明治7年(1874) 生糸を国の特産品に育てようと富岡を拠点にする --- 三菱汽船に投資 --- 三井物産の開業を支援 --- 生糸の輸出も伸びる --- 次に銀行の設立に動く --- 士族の給料が26%だった、これを公債にして銀行の資本とした --- 大部分の士族は困窮した --- 廃刀令を施行する --- 明治9年各地で反乱

*明治7年(1874)江藤新平らをリーダーに、佐賀で起こった明治政府に対する士族の反乱。不平士族による初の大規模な反乱だった

*明治10年(1877)西南戦争が勃発 ーしかし、この年に内国博覧会が開催される(14,000点の出品・54万人入場) --- ガラ紡が普及 --- 次なる輸出品を作るネライがあった
内国博覧会の会期中に西南戦争は終わる

石川県・島根県の士族に暗殺される

明治11年(1878)47歳で暗殺される --- 殖産興業路線をやりぬいたが、政権と企業の癒着が生まれた --- その後住民の自治が必要と考え→議会の創設へ

*暗殺される日の朝、福島県令・山吉盛典に対し、「ようやく戦乱も収まって平和になった。よって維新の精神を貫徹することにするが、それには30年の時期が要る。それを仮に三分割すると、明治元年から10年までの第一期は戦乱が多く創業の時期であった。明治11年から20年までの第二期は内治を整え、民産を興す即ち建設の時期で、私はこの時まで内務の職に尽くしたい。明治21年から30年までの第三期は後進の賢者に譲り、発展を待つ時期だ」と将来の構想を語ったという。